
黒きナイト

悠夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒きナイト

【Nコード】

N1859Z

【作者名】

悠夢

【あらすじ】

アルバス王国。そこには魔法、妖精なんでもある。

この国に住んでいる皇女 アリアンティア。

国から外れ山々に囲まれた村に住んでいる少年 クレイア。

秘密を持った二人の物語。

パーティー2日前 少年少女の日常 (前書き)

始めて書きました。どうか暖かい目で読んでください。

パーティー2日前 少年少女の日常

青い空。緑が生い茂る草原。透き通った川。しかし、ここはみんなが知る世界ではない。

この世界には妖精もいれば喋る木々もいるし竜だっている。そして魔法もある。

国の中心都市 アルバス王国から東側に位置する場所。そこに小さな村がある。山々に囲まれており辺りには生い茂る草花が咲きはなっている。

周りの家は木材で建てられた山小屋風の家が幾つも建っている。ここに1人の少年が暮らしている。黒髪黒瞳、名前はクレイア。十六歳の少年で腰には剣が吊されている。

「フウ…。今日はこんなもんか」

クレイアが目差すは木造の家。扉を開け

「ただいまーっと」

誰もいない家に挨拶をする。ただただ、少年の声だけが寂しく響く。

トレードマークの赤いマフラーを外し、扉の近くに剣帯から吊り下げた剣を壁に立て掛ける。

部屋に置かれた机に晩御飯の魚を置く。背中にあるカゴは床に下ろす。中にはやはり晩御飯のおかずと思われる野菜などが入っている。

クレイアは1人でここに住んでいる。別に家族が亡くなったとかそういう話ではなく。ワケあって離れて暮らしている。

クレイアの家族はクレイアを入れて四人。父、母、一つ下の妹の四人家族。

クレイアの他の家族は城下街に宿屋を経営してしる。クレイアが家を出るまでは結構、繁盛していたので潰れてはいないだろう。

「さて、晩御飯の準備でもするか」
そう言って台所へと向かう。

晩御飯を作り終わる。今日のメニューはサラダ、焼き魚、パン、野菜スープ。

「いただきます」

手を合わせて、食べ始める。
すると、

トントンッ

「ん？誰だろ？」

扉を叩く音が聞こえ箸を置く。
扉を開けると

「こんばんは。クレイアちゃん」

ふくよかなおばさんが鍋を両手の取っ手を持ち立っていた。

「ローザおばさん。どうしたんですか？」

そうこの女性はローザさんこの村の村長さんの奥さん。

「食事中にごめんね。煮物作り過ぎちゃってね。おすそ分け」
「本当ですか？いつもすいません」

クレイアがこっちに着てから何度かおすそ分けを貰っているとても優しいおばさんである。ローザにもクレイアと同じ年の息子マリクがいる。

そのマリクも一人暮らしをしているからクレイアの両親の気持ち分かるのだろう。

「いいのいいの。逆にこっちが助かってるくらいだから」

「本当ですか？なら遠慮なく頂きます」

「うん。クレイアちゃんも私の息子みたいなものだから。それにまだ十六歳でしょう？ならまだまだ食べなくちゃ。育ち盛りなんだから、ね」

「ありがとうございます。おばさんの料理いつも美味しいです」

「ふふふつ、ありがとう。あつと、いけない。食事中だったね。それじゃあ、何かあつたら言つてね」

会話を終えそそくさと、我が家へと帰っていく。

「おばさんも大変なのに俺のことまで気遣つてくれて悪いな。今度、家の方でも手伝いに行こつかな」

ローザの…村長さんの家族は全員で九人家族である。

村長さんのルドルフ、奥さんのローザ、ルドルフの父、母、長男のマリク。今は城の騎士のため城の方にいる。

長女。三男、四男の双子。最後に次女。まだ、二歳だ。

大変そうだけど、とっても賑やかで笑いが堪えないで他人が見ても幸せそうな家族だ。

クレイアにもかけがえのない家族はある。・・・けど・・・今は帰れない。寂しくても今はここにいななければならない。

クレイアはローザから貰ったおすそ分けを抱えて食事の席へと戻った。

埃は一つなく清潔感が溢れている部屋。家具やタンスなどもどれも高級感が醸し出されていて一般市民には到底手が出せない代物ものばかりだ。

コンコンコンッ

規則正しいノックが聞こえ

「アリアンティア様、おはようございます。お目覚めですか？朝食の準備が整いました」

そして、天蓋付きのベッドで一人の少女が目を覚ます。

「んっん~~~~ん」

と、伸びをする。まだ頭がぼーっとしている。

ここは皇女 アリアンティア・グラディウスの一室である。

「アリアンティア様？・・・」

呼び声が聞こえない為、侍女がもう一度声をかける。

「あつ、はい！起きています。どうぞ」

侍女の声で頭のモヤモヤを無理矢理取り払う。

侍女が皇女の部屋に入り一礼した後

「おはようございます、皇女様。早速ですがお着替えのお手伝いをさせていただきます」

「はい。お願いします」 その言葉を待っていたとばかりに部屋の外にで待機していたもう三人の侍女が入ってきて着替えが始まる。髪をとかす者。その髪は金色で汚れ^{けが}一つない。

それは持ち主の心をそのまま写しているように美しくさ純粹さ兼ね備えている。

そして、ドレスを着せる者。薄くだが化粧をしてくれる者。

侍女四人はそれぞれ役割があるようで手慣れた感じで進めていく。

長テーブルに何十個も置かれたイス。大会議室とも思われる大きな部屋。

こは食事をする場所。

そこにはすでにこの国の王と王女がイスに座って娘の起床と朝食を待ちながら夫婦の話をしている。

「アリアまだ起きないのか？」

貫禄のある力強い声。

「あなた、そう焦らないで。あの子は朝が弱いのだからもう少し待って」

優しさが滲み出る声。この国の民を癒してくれる音色。そしてなにより愛も感じられる。

「しかしだな、エリザベス。娘とゆっくり会話ができる時間なのだ。それを削りたくはないのだ。それに二日後にはアリアの誕生日パーティーがあるのだ。それにそれに・・・」

王も人。何より娘が大事で親バカなほどである。

「分かりましたから、落ち着いてください。はあく。焦らなくてもあの子は来ますから」

そうしているうちに

「おはようございます。お父様、お母様」

二人の両親は振り返る。

そこにはあたかも今起きたばかりの寝ぼすけ美少女・・・ではなく紛れも無くこの国の王と王女の娘　アリアンティア・グラディウス皇女がそこに光臨した。

父親と母親が待つ席へと急ぐがそのバタバタした走りが少し高貴さを下げているきもする。

「おはよう、アリア」

待ち望んだ娘が来て満面の笑みの父親。

「おはようございます、アリア。今日も遅かったわね。夜更かしでもしていたの？」

柔らかいすべてを包み込む笑みの母親。

「えへへへっ、ごめんなさい。お母様」

凶星をつかれ苦笑いで答える。

「勉強でもしていたのか？」

「この子が勉強する訳無いでしょ。それよりも朝食にしましょう」

「お母様ひとつどーい」

笑いが起こる。王も女王もあるうことがメイドたちも。

「もうゝ。みんなひどいよ！」

膨れるアリア。その顔もとてもかわいらしい。

メイドの笑いもとくに気にした様子はない。メイドに対しても友達並に仲良くしているのだらう。

「わっはっはっは、やはりアリアといると笑いが絶えないな」

「うふふっ。それよりもユーリ、食事を」　笑いが残るなか食事の準備を促す女王。

「は、はい。・・・食事の準備を」

涙を拭いながら侍女のユーリが手を叩き食事をはこばせる。

食事をとりながら話は進む。

「そうだ、アリア。二日後はお前の誕生パーティーだ。何か欲しい物はあるか？」

王が尋ねる。アリアは手を止める。

「・・・何でもいいのね？」

視線が王に突き刺さる。嫌な予感がしてならない。「いい、いいとも。何でも言ってみなさい。」

しかし、聞かずにはいられなかった。

そして、小さな口から紡がれた言葉は

「お父様、わたし。・・・。。。。。。ドラゴンの赤ちゃんが欲しい」

「そうかそうか。ドラゴンの赤ちゃんか。そんなのお父様にまかせな。・・・なに」

最悪の答えは避けられほつとしたらとんでもないおねだりだった。ドラゴンとはあのドラゴンである。

「ねえ、いいでしょお父様」

「うっ」

「あなた、どうするの？」

「うううう~~~~う。・・・。。。。。。わかった、なんとかするよ」

渋々、オツケー出す王。

「やったー。ありがとお父様」

ドラゴンの入手なんて難しいにもほどがある。

「もう！ほんとに娘には弱いんだから！どうなっても知りませんからね」 本当に王なのかと思うくらいに女王に叱られて小さくなる王。それを視界の端で見ながら喜ぶ演技をするアリア。

（本当は違うものが欲しかったけど・・・）

朝から嫌な雰囲気にはしたくなかった。言う前から分かっていた。だから、言わなかった。言えなかった。

（本当に叶うなら叶えてほしい。わたしが本当に欲しいものは・・・）

それは彼女が願うたった一つの願い。その願いが叶うことはこれから先あるのだろうか。

その後、家庭教師による勉強と魔法の授業を受けた。

昼食を終えた後、アリアは父である王の元へ来ていた。

アリアは王の自室まできてノックの後

「誰だね」

「わたしです。アリアンティアです。お父様、今大丈夫ですか？」

「アリアか。大丈夫だぞ。お前ならいつでも大歓迎だぞ」

承諾を得、中へと入る。王の机には書類が山積みになっている。

「それでどうした」

「お父様にお願いがありましたここに参りました」

王はドキッとした。今朝のおねだりもある。しかし、聞いてみないことにはわからない。

「そ、それで何かな？お願いとは」

「えっと、ですね。午後に城下街の方にお出かけしたいのですけど、いい？」 「城下街に？・・・あゝ、またロイドの所か？」

「うん、そう。」

「そうか。たまには生き抜きも必要だな。いいぞ、行つてきなさい。・・・そうだ、ついでにパーティーの招待状も渡してくれないか？」

「うん、わかった。それじゃあ準備してくるね」

その言葉を最後にものすごい素早さで行った。

「やれやれ」

と、悲しげに呟く。あの子にはこれぐらいでしか罪滅ぼしができない。ならこれぐらいなら許してあげよう。

そんな王の思いと眩きだけが残った。

アリアは急いで部屋に戻りワンピースへと着替え城門へと向かった。

城門前には見慣れた少年が立っていた。

「今日もよろしくね、マリク君」

「はい」

マリクと呼ばれた少年は無愛想だが礼儀だけはしめしている。

十六歳ながらも皇女の護衛を任せられくらいの实力を持った少年。
「・・・って、ちよつと待って。まさかその格好でこれに乗って行くの？」

「？そですが、何か？」

少年の格好はいつも付けている黒いマントにいつもの軍服姿。

城の中ならまだしも城外では目立つ。

乗り物は馬車。馬車なのだが豪華過ぎる。いかにも皇族が乗っています。す的な外見をしている。

「いや、その。その服装とこの馬車は何？」

「いつも使っているのですが」

「たしかにいつも使っているけど。一応、お忍びで行くみたいな感じだから。服装は私服でいいし馬車もいらさないから」

「そうですか。それなら着替えてきますのでここお待ち頂いてもよろしいでしょうか？」

「オッケー」

マリクは城の方に向き直り歩き出す。

「アリアンティア様。くれぐれもお一人でお出かけにならないようにお願いします」

ドキッ。一本踏み出そうとしたところで凍るアリア。

「ヤッ、ヤダな。そんなことしないよ」

少し棒読みっぽくなってしまっている。

（後ろに目でもあるの！？）

「そうですか。それでは失礼します」

「・・・・・・・・・・よし！それじゃあ。ん？」

マリクの姿が見えなくなったのを確認し足を動かそうとしたが・
・動かない。

「えっ！？なんで？なんでわたしの足動かないの！？」

少し混乱しながらも足元を見る。すると、足が凍っている。足と地面が一体化しているように凍っている。凍ってはいるが冷たくはない。

「ウソ！？もうマリク君ったらー！ん~~~~ん！」

アリアの足はマリクの魔法によって凍らせてあった。

アリアが凍り付いた足に苦戦していると

「アリアンティア様。ただいま戻りました」

背後にマリクがいた。

「あつ！マリク君！ひどいじゃない！」

「すみません。しかし、アリアンティア様は絶対にお一人で行かれると思ったので」

「何それ。わたしそんなに信用ないの？」

「はい」

「はいって、少しはわたしを信じてよ」

「すみません。しかし、現にアリアンティア様は動こうとしましたよね？」

ドキッ。また見抜かれてしまった。

「ああ、これは、その」

考える。考えを搾り出す。

「え〜と。・・・・・・・・あつ、そう。準備運動していたの」

「準備運動？」

「そうそうそう！準備運動！ず〜と城にいるしこれから歩くんだよ！だから、筋肉を伸ばしてたの！うんうん！準備運動大事だよ！」

必死の言い訳。だれが聞いても言い訳にしか聞こえない。いや、

あの王なら信じるかもしれない。

「そうですか。それならもう行きましょう」

アリアを追い越し先に進むマリク。それを見たアリアは

「ちよつと待ってよ、マリク君。わたし動けないんだけど」

「何言ってるんですか？足元をよく見てください」

「えっ？」

マリクに促され足元を見る。すると、さっきまで氷で地面に張り付かっていたのに氷がなくなっていた。そうマリクが魔法を解除していた。マリクが戻って来てすぐに。アリアは必死言い訳で気が付かなかったが。

「早く行きましょう。せつかくの時間がなくなりますよ」

そつ言つて歩き出す。

「もう、待ってよ皇女であるわたしを置いて行く気？」

「はい」

一刀両断。

「もう、待ってつて」 そんなことを言いながらピョンピョン

跳ねマリクの後を追い掛けて行く。

目差すは城下街にある宿屋さん。

城を中心に周りにはいろんな所がある。

そして、今目指している場所、宿屋さんは町の商店街の方。城の南側に存在する。

アリアは目的地に向ながらもウインドウショッピングを楽しんでいる。「これ可愛くない？」と可愛いものを見つけてはマリクに聞いている。

この国の皇女でもまだ十五歳。年頃の少女なのでオシャレなどに興味があるのは当たり前である。

ちなみに周りの人達はアリアのことを皇女だとは気付いていない。そんなこんなで民衆には気付かれず目的の場所に到着する。

ガジャッ

店の扉が開き反射的に少女は振り返る。

「いらつしやいませ」

元気のいい挨拶。

「こんにちは。エレナちゃん」

エレナと呼ばれた少女はお客の顔を見て固まる。

「えっ？なんているですか？今日でしたっけ！？来るの？」

「ううん。いきなり来ちゃいました」

「そんな。困りますよ、いきなりは。こっちも準備がありますから。もう、お父さん、お母さん。ちょっとこっち来て」

「どうしたエレナ。そんな大きな声出して」

「そうよエレナ。お客様もいるんだから」

エレナの両親が出てきてアリアの顔を見て固まる。「皇女様！？すみません！お迎えもしないで」

「あつ、いいんですよ。わたしが急に来ちゃったんで。気を使わないでください。それにあんまり大きい声で言われるとわたしってバれますんで」

「あつ、はい。すみません。それで今日はどういったご用件で」
なんとかエレナの両親は落ち着きを取り戻し用件を聞く。

「得に用はないけど、何となく来なくなっちゃったの」

笑顔で答えるアリア。

「あつ、それじゃあ、後でお買い物行きませんか？」

エレナがアリアを誘う。「アリアンティア様。用件はあります」

「えっ、そうだっけ？うーーーーん。……あつ、そうだった！おじさん、はい」

アリアは思い出し招待状をロイドに手渡す。

「これは？」

「アリアンティア様の誕生パーティーの招待状です」

ロイドの疑問にマリクが答える。

「えっ？本当ですか？アリア様」

「うん、本当だよ。あと、いつもの呼び方でいいよエレナちゃん」

「うん、わかったよ。お姉ちゃん」

皇女に一般市民がお姉ちゃんと呼ぶのは無礼なことだがこの二人は幼なじみである。別にエレナなの家も王族ではない。

ただ偶然に小さい頃知り合いそれから仲良くなったというわけだ。お姉ちゃんと呼ばれご満悦のアリア。アリアには兄弟がいないため尚更嬉しいのだろう。

「あのー、皇女様。せっかくお招きされて誠に申し訳ありませんが、私達は遠慮させていただきます」

申し訳なさそうにロイドが答える。

「本当に申し訳ありません。気持ちとはともうれしいのですが、一市民である私達が皇族の方々と一緒にはいられません」

エレナの母が続ける。

「うん。たしかにいくらいなもしれない。わたしもあんまり得意な人達じゃないし」

「アリアンティア様」

口調が少し強くなるマリク。

「ごめんごめん。それじゃあ、お父様には来られないって言うておきます」

「はい。本当に申し訳ありません。あと、アリアンティア様、この度は十六歳誕生日おめでとうございます」

ロイドの言葉とともに他の二人もお辞儀をする。

「はい。ありがとうございます。その言葉だけで十分嬉しいです」それを満面の笑みで返すアリア。

「それじゃあ、お姉ちゃんちょっと待ってて。出掛ける準備するから」

エレナが自分の部屋に行ったのでイスに座って待たせてもらうことにした。出された紅茶を飲みながら。

町に着たはいいが目的地は決まっていな。ただ、いきあたりばったりで店を見て回。他愛もない会話をしながら。遠くから見れば仲の良い姉妹が友達にしか見えないだろう。

「アハハハッ・・・。ところでさアイツから何か連絡とかあった？」

笑いの後、少しだけ真剣な顔付きになるアリア。

「・・・もしかして、兄さんのこと？」

エレナもアリアつられてか真剣な表情になっていた。

「うん」

「・・・特に、ないよ」 齒切れが悪い返事。

「そう。それならいいの・・・じゃあ、今度はあそこのお店見てみよ」 アリアはそんな返事を気にした様子はなくすぐに話題を変える。

「う、うん。待ってお姉ちゃん」

アリアを追うエレナ。何かを隠している。

マリクは遠くで二人の見守っている。何が起きても大丈夫なように。

もしなにか起きたとしてもあの方だけは守らなければならない。

この世界の女神である。あの方だけは。

そんなことを考えながらマリクの視線はアリアから離れることはなかった。

パーティー2日前 少年少女の日常 (後書き)

少しごちゃごちゃしてますが、ここまで読んでくれてありがとうございます。
ごぞいます。

次も頑張って書いていきますのでよかったですら読んでください。

パーティー前日1 不穏な動き

アリアはいつも通りの朝を迎えた。今日はいつもと違い慌ただしい一日になりそうだった。

なにせ明日は自分の誕生パーティー。自分が主役である。なのでアリアの挨拶、アリアの衣装を決めなければいけない。

「あゝ、今日は疲れそう」

朝が弱気なアリア。朝が弱いからでもある。

ところで今はというとドレスの試着中である。なので着替えさせてくれるメイドがいつもの倍以上いる。衣装も数えきれない。

メイド達はアリアにドレスを着せては脱がしの作業を繰り返し行っている。

気が付けば後ろにはドレスを持ったメイドの行列があつた。アリアはその行列を見て俄然やる気が下がった。

メイド達はそんなアリア気にせず「こっちの方がアリアンティア様に似合ってます」 「こちらの方が大人っぽく見えますよ」 「やっぱりアリアンティア様にはピンクが似合いますね」 などなどもはや着せ替え人形のようになっていた。

そんなアリアはされるがままの無抵抗。

（うううううう）

心の中で呻く。

一着を決めれば言い訳ではない。最低四着。

午前中に町を回るために着るもの。昼食の食事会。最後に夜パーティー用。後はもしもの時の予備。

（・・・はっ、はやく、終わって・・・）

アリアの悲鳴はだれにも届かずドレス決めは昼食を挟んだ後も続けられた。

残りの午後の時間は何を話すか考え、練習をした。すべてが終わった時には日もとくに暮れていた。

アリアは夕食とお風呂が終わったあと自分の部屋に戻りベットに倒れ込んだ。

「もうダメ〜！疲れた〜！」

精魂尽きた感じになっていた。

「明日はちゃんとしないと」

その言葉を最後に眠りについてしまった。

午後の時間。マリクは訓練場にいた。

毎日の日課となっている訓練をしている。しかし、マリクもこの国の騎士、任務がない時以外はほぼ毎日行っている。

対人戦もするがマリクはだいたいシュミレーションで訓練する。

シュミレーション戦なので対戦相手もホログラム。しかし、相手の強さ、数、対戦時間など設定できる。

今のフィールドは荒野。無限に広がる荒野。

辺りには何一つない。あるのは地面の土、枯れた木が数えられるくらい。

そこにマリクがいる。

マリクは荒野に立ち武器を展開している。両端から刃があり、中央部には柄がある。二本の剣を柄どうしで取り付けた感じだ。

刃は透明で水色の光を放っている。マリクが魔力で形成された刃。その戦闘態勢のマリクを五人が取り囲んでいる。

『プログラム設定。エネミーレベル、MAX。人数99人。時間無制限。・・・いつも通りの設定完了。準備はいい？マリク』

スピーカーから聞こえてくる女性の声。

「ああ、いつでもどうぞ」

冷静に答える。

『それではシュミレーション訓練を開始します』

その言葉とともに相手が一斉に動き出す。腕を刃物変化させて。エネミー達は囲んでいる状態のまま中心にいるマリクに切り掛かる。

マリクは当たるギリギリのところで屈みツインブレードを頭上に掲げて受け止める。数センチ上では刃どろしがガチガチと力比べをしている。一歩間違えは死が待っている。

それでもマリクには恐怖を与えるには足りなかった。

「雑魚が束になって」

ただ切り捨てる。

マリクは屈んだままツインブレードに回転を加えながら五本の刃を跳ね返す。エネミー達は後方に吹き飛ばされる。反撃されないためにすぐに動くマリク。狙いは正面の敵。凄まじいスピードで敵に追い付き刃を振り下ろす。

エネミーは飛ばされた状態だかマリクのツインブレードを受け止め、弾く。しかし、マリクはそれを予想していたとばかりに弾かれたと同時に相手の後ろに回り込み切る。1体撃破。それでもマリクの勢いは止まらない。

残りの4体も苦戦せずツインブレードで切り裂く。『やっぱり強いな。それじゃあ、次』

5体追加。またもマリクを囲んで出現。

マリクの周りに水色のオーラを出現する。

「我を守る盾よ シールド」

マリクの周りに六角形の板が3つ現れる。

「くらえ！ アイスホーン」

かざしたマリクの手から鋭く尖った大きな氷柱が出現し放たれる。相手は体を貫かれ倒れる。

残りも シールド で相手の攻撃をガードしつつ下級魔法で撃破する。

『マリク、ウォーミングアップはこれくらいでいい？』

「ああ。後は雑魚、全部出せ」

『了解』

承諾もらいエネミーを出す。そう今度は全員。フィールドを次々に埋めていくエネミー。

荒野には88体のエネミーにマリク1人。

こんなこと自殺行為にしか思われないがマリクは攻める。四方八方からの攻撃に シールド で防ぎ斬撃と下級魔法で対抗する。

全体魔法も使えるが敢えて使わない。

敵の数はみるみるうちに減っていった。そして残り20体をきつた頃。

「そろそろ終わらせるぞ」

マリクの周囲の空気が変わった。さらに凍てつくように。

エネミー達は残る全勢力でマリクに挑む。眼前に迫る敵に対してもマリクは目を閉じる。

集中する。

「氷の粒手よ。我が敵を撃ち抜け。 ダイヤモンドダスト 」

先頭に来ていた敵が刃を振り下ろす。しかし、目の前で刃が止まる。

マリクの魔法が発動。氷の粒が無数に出現。

敵目掛けて一斉にガトリングガンのように撃ち出される。次々向かってくる敵を返り討ちにしていく。

細氷^{ほこり}が止んだ時には敵の姿はなく荒野にはマリク1人だけ残された。

『さつすが、マリクだね』

感心した声が聞こえる。

『じゃあ、最後の1体行くよ』

「さつさと来い！」

スピーカー越しの女性にではなく戦う相手にだ。

最後1体は特別でボス的存在だ。

『今日の相手はコイツだー！』

敵が現れる。2メートルを超える長身。体は筋肉の鎧で覆われて

いる。大斧を携えた二足歩行の大トカゲ、リザードマン。爬虫類独特の目でマリクを捕らえる。

「ゲガアアアアアー……」

獲物を見つけての咆哮。体の奥まで響く。

「今回はリザードマンか。雑魚ほどよく吠える」

リザードマンの咆哮に怖じけることなく毒づく。

リザードマンはマリクの言葉を理解したのか再度、怒りの咆哮拳げマリクに迫る。

リザードマンは大斧を横に一閃するがマリクはバックステップかわしアイスホーンを腹に当てる。貫くことはできなかったがダメージは大きい。

「チツ、やはり硬いな」

そんなことを言っているがまだまだ余裕がある顔付きだ。

その後の展開はというと言うまでもなくマリクが優勢で進んでいく。

パワータイプのリザードマンに対しマリクはスピード重視で攻撃を回避し隙を見て魔法と斬撃でダメージを与えていく。

そして、マリクはリザードマンの正面に突っ込む。リザードマンもそれに応戦する。

大斧が振り下ろされマリクもツインブレードを下から切り上げる。大斧は空を切り勢いよく地面に突き刺さる。マリクはすでに相手の後側にいる。

傷口から鮮血が吹き出す。それからリザードマンの手から大斧が離れる。

手応えは十分にあった。誰もがマリクの勝利で訓練終了と思われる。しかし、終わってなどいなかった。

システム管理室

警報と共に赤いパトライトが点灯する。

「どうしたの!？」

スピーカー越しで聞いた声の持ち主。

「分からない!しかし、何者かがシステムに侵入したと思われる」
男性の焦った声。周りの人達も慌ただしく動き回っている。

「なんでこんな時に!いいわ、まずは訓練を中止しマリクを呼び出して!」

しかし、マリクをモニタリングしていたモニターが、すべて真っ暗になる。

「レイヴィ!駄目だ!システムが全停止した」

レイヴィと呼ばれた少女。19歳でシステム管理室のオペレーターをしている。

マリクとはマリクが入団した時に知り合いそれからの付き合いだ。
「どうしよう」

戸惑うレイヴィに対し状況は悪くなる一方。

フィールド・荒野

異変はすぐに訪れた。

マリクは背後から爆発するかのように膨れ上がる魔力を感じた。
背後を振り返る。

そこには倒れる寸前だったリザードマンが背後に・・・もう手の届く距離にいた。リザードマンは腕を振り上げていた。

「くそがつ! シールド」

回避が間に合わず仕方なく シールド を無数召喚し壁を作る。
向きを変え腕をクロスさせガードの態勢をとる。

リザードマンの爪が シールド を突き破りマリクに直撃する。
「くっ!」

マリクは抗うことなく後方に飛ばされ丘になっている壁に激突する。

丘は激しく崩れ辺りは砂煙で見えないくらいだ。

砂煙が晴れマリクが顔を出す。すると、リザードマンの様子がかしい。

筋肉で覆われた体がさらに膨張し太く力強いものとなり体格も大きくなる。爪も牙も鋭さが増す。

変化が終わった時には4メートルに近い身長になっていた。

「くそがつ！・・・何なんだ、アイツは！」

たしかに倒したはずだ。手応えもあった。なら何故ヤツは消えない。どうして変化する。今までこんなことはなかった。ならシステム管理室で何かあったか。

「おい、レイヴィー！あのリザードマンどうなってるんだ！」

1人で考えてもしかたない為システム管理室に声をかける。

『・・・・・・・・・・』

しかし、なんの応答もない。

（やはり、あつちでも何かあったか。となると、考えられる原因は1つしかないか）

リザードマンを見る。どちらにしろヤツを倒さなければどうにもならない。

「訓練の追加だと思えば余裕だろう」

これからの方針が決まり起き上がる。

強化型リザードマンは狂いそうなほどの咆哮を挙げている。

そんなリザードマンを見据えツインブレードを握り直す。再度、戦闘モードに入る。

先に動いたのは意外にもリザードマンだった。

「何！？」

凄まじいスピードに思わず声が出てしまった。さっきの比ではない。倍、それ以上に。マリクとほぼ同じくらいだろう。

「くっ」

シールド が間に合わず爪撃をツインブレードで受ける。

「雑魚のくせに！」

だがそれで終わりではなかった。マリクは氷像に追撃を加える。氷がツインブレード全体を覆われていく。

「クラスト・エッジ」 氷の刃を振り抜く。

声を上げることでもできず切り付けた部分から砕け散る。あとに残されたのはリザードマンだった氷の残骸だけ。

「ふん」

一度、剣を振る。

「いつまでそこに隠れてる」

「ふふっ。やはり、バレましたか。さすがですね」

さつきマリクが激突した丘の瓦礫から姿を表す。黒いフードを被っている怪しいヤツ。

「お前がやったのか？」 「まあね」

聞いているとやる気がなりそうな間の抜けた声。幼いような感じもする。

「お前の目的はなんだ？ 内容によつては・・・殺す！」

そんな黒フードに怯まず話を進める。

「ちよっ、ちよっと待つてよ！ そんな怒らないでよ。僕はただ君を見に來ただけだから」

「何の為に？」

「だから、ただ見に來ただけだつて」

「・・・ふざけるな！」

黒フードに切り掛かる。が、手応えは全くなかった。

マリクは黒フードを見失う。

「おゝゝゝい！ こつちだよ！」

マリクは声の聞こえる方に振り向く。

黒フードは違う丘の上に移動していた。

「危ないじゃないか」

（余裕だつたくせに！）

心の中で舌打ちする。

「僕は本当に見に來ただけなんだよ。これ以上ここにいると本

当に殺されそうだから僕帰るね。・・・あと、これ返すね」

と、黒フードは何かをマリクに投げってくる。マリクは反射的に受け取る。

「な!？」

それはアクセサリー。いつも剣帯に吊り下げていた物。レイヴィに無理矢理持たされたお守り。

マリクは慌てて剣帯に目を向ける。やはりない。

「ニヒヒヒツ。それじゃあ、バイニャ」

視線を戻した時にはもう誰もいなかった。

『マリク、大丈夫?』

通信が回復したのかレイヴィの声が聞こえてくる。 「・・・」

『マリク?』

返答がないため聞き直す。

「ああ、何でもない」

とにかく異常がなくなったのだと確認し氷の刃を解く。柄だけになったツインブレードをマントを翻して腰に戻す。

レイヴィのお守りを剣帯に戻す。

「レイヴィ。どうなっているんだ?」

『それが分からないの。いきなり、システムが誰かに乗っ取られてシステム全停止。モニターも切れちゃったからそっちの状況も分からないの。マリクの方はどうなったの?』

「そうか。俺の方は・・・」

マリクはさっきの出来事、倒したはずのリザードマンが蘇って襲ってきたこと黒フードのヤツがいたことを報告した。

『そっか。それじゃあ、その黒フードのヤツがマリクの実力を見たかったってこと?』

「そうかもしれないし他にも何か目的があったのかもしれない。

それに・・・嫌な予感がする」

マリクは険しい顔付きになる。

何故この時に?何故アリアンティア様の誕生パーティー前日に?

何か嫌な予感がしてならなかった。

マリクは訓練場を後にした。

王に報告するために自室に向かったマリク。

報告後、王は悩んだが誕生パーティーを中止にはしなかった。

他の国の王などもこちらに向かつて来ている。パーティー前日にキャンセルなど失礼過ぎる。事情を話せば分かってくれる人もいればそうでない人もいる。

城の守りを増やす考えで話は進められた。

パーティー前日1 不穏な動き (後書き)

今回はマリクの魔法バトルを中心に書きました。どうでしょう。
また、読んでください。

パーティー前日2 悪い予感

今日は昨日のお礼ということで村長の家に向かった。

ローザは庭で洗濯物を干しているところだった。

「クレイアちゃん、本当にごめんなさいね」

ローザが洗濯物を干している。長女のエリは母の手伝いをしていく。

「いえいえ、俺の方がいつもお世話になってるんでこれくらいどうってことないです」

「ありがとう。ちょっと、あんたたちもつとあつちで遊んでなさい！洗濯物に埃が付くでしょう！・・・はあ、本当にクレイアちゃんをちよつとは見習ってほしいわよ」

洗濯物の近くで走り回る双子の兄弟。すごく楽しそうだ。

「元気があつていいじゃないですか。それにあの年だとあれが普通ですよ」

そういうクレイアはというと一番下の女の子 イリムとままごとをして遊んであげていた。

「ねえ、お兄ちゃん。今日は晩御飯までいるの？」

「いや、晩御飯前には帰るよ。毎日悪いし」

エリの問いにクレイアは遠慮して答える。

「えー！晩御飯食べていけばいいのに！」

残念そうな声で言うのでクレイアも苦笑いになっていた。

「そうよ。遠慮しないで食べていきなさい」

ローザもすすめてくる。「えっ、でも・・・」

「もういいから食べていきなさい！」

「・・・分かりました。それじゃあ、今日もお世話になります」「よしよし」

ローザに強い口調で言われ根負けしたクレイア。ローザは結構、頑固なところがあるので結局食べていくことになる。

別にクレイアにとってローザ達と食事することは苦ではない。正直、いつも1人で食事をしているので逆に有り難い。

「なあなあ、兄ちゃん」 庭先から名前を呼ばれ振り向く。

「今度は俺達と遊ぼうよ」

双子の兄 アルが家の中に顔を出して言ってくる。

「もうちょっと待ってるよ。さっきジャンケンで負けただろ。イリムが先って決まっただろ。イリムが満足するまでな」

「もうちょっと待とうよアル」

双子の弟 ロンが静止させる。ロンはアルに比べ少し物静かである。

ちなみに見分け方は右目にホクロがあるのがアルで左目がロンである。

「ええー！つまんねーよ！」

「もう、クレイアお兄ちゃんはわたしとあそんでるんだからアル兄はあっちいつててよ！」

痺れをきらしたのかイリムが怒り声で言うてくる。

「なんだとー！」

ケンカになりそうな雰囲気。

「アル！あんたうるさい！」

エリが怒鳴る。

「はあ！？お前に関係ないだろう！」

火に油状態で2人は睨み合ってバチバチ火花を散らしている。

「ちつよと、2人ともケンカはやめるよ。アルも午後に遊んでやるからそれまでロンと遊んでるよ、な」

ケンカになりそうなところをクレイアは止めようとする。

「マジで！？ヤッター！ロンあっちで鬼ごっこしようぜ！」

すごく単純なアル。

「またー？待ってようアル」

ロンも渋々ながらアルに付いて行きまた走り回っている。

「本当にごめんなさいね、クレイアちゃん」

今のやり取りを聞いていたローザから謝罪の言葉が届く。

「大丈夫ですよ」

いつもの優しい笑顔で返す。

「お兄ちゃん！」

イリムが頬を膨らませて怒っている。とてもかわいらしい顔で。

「ごめんごめん。続きをやるっか」

「うん」

（そういえばアイツも怒った時はあんな顔で怒っていたなあ）

心の中で思い出す1人の少女。大分、逢っていないあの少女の顔を懐かしく思い出すクレイアだった。

昼食の後、約束していたアルとロンと遊んであげることにした。

「なあ、兄ちゃん！秘密基地に行こうぜ！」

瞳を輝かせて言うてくるアル。

「うんうん！行こうよ！」

ロンも誘ってくる。

「秘密基地か。そうだな、久しぶりけに行くか。」

「「ヤッター！」」

二人の喜びの声が重なる。双子独特の重なり声。

こうしてクレイア達3人は秘密基地に行くこととした。

秘密基地は裏山にある。山といっても獣道を行くというわけでもなく普通の山道を登って行く。

この山には鹿や兎などが住み着いている。川には魚もいるのでこの村の食料元になっていてこの村にとってなくてはならない場所だ。凶暴な魔物などは何十年も確認されておらず安心できる所でもあって子供達も遊びの場ともなっている。

しかし、一部の猪は暴れん坊ではあるがこちらから何もしなければ襲ってはこない。襲って来たとしても倒せない相手ではない。

そんな山を3人は登って行く。

アルは小枝を片手に探検隊の隊長気取りで先頭を進む。大きな声で歌を歌いながら。

ロンはアルの後に続き、アルに合わせるように大きな声で歌っている。

クレイアは一番後ろから「ホント元気だなあ」と思いながら2人を見守っている。風で赤いマフラ^{なひ}ーが靡^{なび}いている。クレイアの腰には愛用の剣がある。安心できる山だと言っても何が起きるか分からない為、念のために持ってきている。

「お前らあんまりはしゃぐなよ！」

2人には逆効果でさらに大きな声で歌っている。

そんなこんなで山の中腹くらいの所にその秘密基地がある。

3人の秘密基地は木の上であり木をかき集めて作つてある。壁はないが雨を凌ぐ屋根と床に一応、落ちないように策がある。

「到着だー！」

アルが吠える。

「疲れたー」

ロンが弱音を吐く。

「よし！今日はだな〜・・・」

「待つてよ！ちよつと休ませてよ」

「何言つてんだよ！兄ちゃんが遊んでくれてんだろ！時間がもつたいないじゃないか！」

やつとクレイアが遊んでくれたことに疲れよりも喜びの方が勝っていた。

「アルも俺も疲れたからさ、休も」

疲れたようには見えないがロンに気を使つたのは明白だった。

「えっ！・・・うゝん。まあ、兄ちゃん言うならしかたないか」
しかし、アルは気付かなかった。

「悪いなアル」

「いいよ。それよりあとでしっかり遊ぼうな？」

「オッケー！」

親指を立てて笑顔で答える。

納得したアルが先に歩き出した。

「クレイア兄ちゃん、ありがとう」

ロンが申し訳なさに言ってくる。

「うん？ 気にすんなよ、ロン！ それより、ちゃんと体力戻しとけよ！ これから目一杯遊びんだから！」

先程と変わらない笑みで言うクレイア。

「うん！」

そう言っ てアルを追いかけるロン。結構元気そうに走っていった。

10分、15分程休んだあと。

「よっしゃあ！ 今日はモンスター狩りだ！」

アルやる気に満ちていた。

「モンスター狩りって言ってもいつもの猪狩りでしょ？」

「猪狩りじゃない！ だれがそんな名前で呼ぶかー！」

「でも・・・」

「でも、じゃない！ それに猪だけじゃない！ 一番デカイのを持って来たヤツが勝ちなんだからモンスターでもいいだろ？」

「分かった！ 名前はモンスター狩りな。ロンもそれでいいよな？」

「う、うん」

いまいち納得してなさそうなロンであるが話が進まないため無理矢理納得させる。

「それで他はいつもと同じか？」

「そう。いつも通り一番デカイのを持ってきたヤツが勝ち。時間は夕暮れ前まで」

「オツケー、分かった。」

本当は子供にそんなことさせてはいけないがこの2人は魔法が使える。そこら辺にいる普通の子供よりは断然強い。この山にいる獣程度なら負ける訳がない。

「その前に俺から、な」と、クレイアが付け加える。

「分かってるよ、兄ちゃん。あんまり遠くに行くなだろ？」

「分かってるならいいけど。あと、もしヤバイ奴がいたら何もしないで逃げるよ。それと俺をすぐ呼ぶこと。いいな？」

念のために言っておく。「あいよ！」

「うん、分かった！」 2人の返事を確かめる。

「よし、じゃあ、行こうか！」

「号令は俺が言うよ！・・・よい・・・スタート！」

アルの号令で3人は一斉に別々の方向に飛び出した。

ロンは秘密基地から遠く離れずに辺りを搜索している。あまり、危険に身を置きたくない。ロンらしいといえばロンらしい。

ガサガサ

と、草木が揺れる。

「ひっ！」

いきなりのことで驚きが口から出てくる。

恐る恐る音の方を見る。

すると、

「ウガアアアーーー！」

草むらから影が飛び出してくる。

「うわぁー！」

ロンはたまらずしゃがみ込んでしまった。

「ハハハハッ！なんだよそれ！」

笑い声が聞こえそっちを見る。そこにいたのはアルだった。

「ビックリさせるなよ、アル！」

「ワリーワリー！」

アルは笑いながらも手を差し出す。ロンはその手を取り立ち上がる。

「まったく！それよりなんでアルここにいる？」

その質問を待ってたしたとばかりに悪い笑顔になる。

「今日は協力しようぜ！」

「協力？」

なんだか悪い予感がしてきたロン。しかし、決め付けるのはまだ早い。一応、聞いてみることにした。

「そう。兄ちゃんをギャフンって言わせるために大物を見つける。そのためにはロン。お前が必要だ」

嫌な予感が当たりだしてきた。

「イヤだ！」

きっぱり断る。

「って！なんでだよ」

「危ないだろ？」

「冒険に危険は付き物だ！」

胸を張って言い切るアル。清々しいまでに。

「だけど・・・」

「だけど、じゃない！お前は兄ちゃんをビックリさせたくないのか？」

「それは・・・させたい」

「なら、大物を捕まえるために俺についてこい！」 少しの間悩む。クレイアを驚かせたいのは事実。しかし、危険もついてくる。

その二択で揺れ動くロン。

そして答えを出す。

「もう！わかったよ！アルについてくよ！」

クレイアを驚かせる方の気持ちが勝ってしまった。もうヤケクソ状態のロン。アルの方はうまくロンを誘導ししたり顔。

「それで？宛てはある？」

「もちろん！俺達はこれから頂上に向かう。」

「大丈夫？」

「大丈夫に決まってるだろ！俺達のコンビに勝てるヤツがこの山

にいるかよ！それに兄ちゃんに勝つには上に行かないとダメだ！」

「・・・分かった。じゃあ、行こう」

渋々ながら頷くロン。

こうして2人は打倒クレイアを掲げ大物を求めて山頂へと向かった。

高い木々の葉からギラギラと赤く輝く2つのものに気付かずまま。

しばらくした後

「今日もそこら辺にいる猪でもいつか。晩御飯のおかずにもなるし」

クレイアは秘密基地の近くにいた。別にやる気がない訳でもないが勝ちを譲っている。大きすぎず小さすぎないものを捕まえてくる。しばらく散策していると程よい大きさの猪を見つける。

「アイツでいいか」

そう呟くとハントを開始する。

クレイアは猪に向かって行く。剣を鞘に入れたままめった打ちにして速攻で仕留める。

「フウ、おかずゲットつと」

クレイアにとっては晩御飯のおかずを取りに行った程度でしかなかった。

クレイアはそのおかずを担いで秘密基地に戻る。

2人の姿はなかった。

日没まではまだ時間があつたで獲物を追っているのだろう。2人が戻ってくるまでクレイアは剣の素振りをすることにした。

剣を抜き構える。目を閉じ肺に空気を入れ吐き出す。呼吸を数回行い集中する。

目を開くとともに動き出す。切り下ろす、薙ぎ払う、切り上げる、突く。流れるような動き何一つ無駄のない動き。まさに川の流れそのもののように。

そこでクレイアの動きが止まる。

川の流れを止めたのは音だった。上空で何かの爆発音が響く。

クレイアは空を見るが何も異常は見受けられない。空に目を向けているとまたしてもドンつと聞こえてくる。

まだ音の残響が残るなかクレイアは走り出していた。

クレイアは一瞬のうちに理解する。

あれはアル達の緊急コール。空で見えた光景は巨大な岩が地上から上空に打ち出され火の玉が破壊するというものだった。

魔法でやっているのは明らかだ。アルの得意魔法は火。ロンは地。それを知っていればすぐに分かる。

だからクレイアは走っている。木々の間をすり抜け、草花を飛び越える。

「アル！ロン！何処だ！」

呼ぶか返事はない。あの2人が助けを呼ぶ相手。胸騒ぎする。

先を進みながら時たま上がる目印に向かう。

そして、木々がなくなり開けた場所に出た所でまた、目印が上がる。目印はほぼ真上辺りで確認することができる。

「アルー！ローン！」

「兄ちゃん！」

「クレイア兄ちゃん！」

声が返ってくる。

「アル！ロン！こっちに来ーい！」

2人を自分の方に誘導する。2人もクレイアがいる木々を抜けて開けた場所に出てくる。クレイアの所に向かってくる。

そして、アル達を狙っていたヤツが姿を表す。

「っ！？」

クレイア絶句する。予想を遥かに越えるもの。予想にも出てこないものが出てくる。

赤い双眸。緑の鱗で覆われた身体。背中には翼。手足は細いよう
でいて筋肉が浮き出ているくらいに発達している。身体と同じくら

いに長い尻尾。頭から尻尾までに刺のようなものが並ぶ。牙と爪は鋭く刃そのものだ。

「なっ、何でこんな所にドラゴンが!？」

ドラゴンは四足歩行でアルとロンに迫っている。クレイアからは到底間に合わない。

アルとロンはドラゴンに届くか届かないかのギリギリ位置にいる。
「うわっ!」

そこでロンが派手に転ぶ。

「ロン!」

クレイアは叫ぶ。この距離からではこれしかできない。

「ロン! くそっ! これでもくらえ! ファイヤボール」

アルの手から火球が出てくる。火球はドラゴンの顔目掛けて飛んで行き、直撃する。

ドラゴンには傷一つ付いていない。ドラゴンの牙がロンに迫る。

「うわー! 助けてー! クレイア兄ちゃん!」

ロンの悲痛な叫びがクレイアの耳に痛く響く。

「くっ!」

(なんでこんな誰もいない時に! もし魔法を使って・・・)

アルはロンを庇うように身体を近づける。2人に死が近づく。受け入れたくない死に対して目を背ける。

「それでも!」

クレイアの足に力が入る。跳ぶ。普通なら届くはずもない距離を跳ぶ。魔力変換で筋力アップの結果である。

「見殺しにするよりマシだ!」

クレイアは2人とドラゴンの間に入り剣を抜き牙を弾く。その隙に2人を両脇抱えドラゴンとの距離をとる。

「2人は離れてろ」

そう言って2人を逃がす。

「もしそっちに行ったら、ロン! お前の魔法でアルを守るんだ!」
ロンは防御系の魔法が得意である。

「うん！」

力強い返事が返ってきた後、2人はここから離れる。

クレイアは2人が離れたのを確認にし顔が綻ぶ。ドラゴンに向き直り剣を構る。

剣の切っ先が敵を狙う。

ドラゴンの双眸がクレイア捕らえ雄叫びを挙げ突進してくる。クレイアもドラゴンに突っ込む。

交錯する。クレイアの斬撃は鋼の鱗に弾かれる。

ドラゴンの爪はクレイアを確実に捕らえることは出来ず左肩の衣服を切り裂くだけだった。

ドラゴンは続けざまに突進してくる。

クレイアは剣で爪撃の軌道を変えただけで終わる。クレイアが通り過ぎたと思った瞬間に右側から動く気配を感じる。気付いた時には目の前にそれはあった。それは尻尾だった。

「くっ！」

回避が間に合わず剣でガードする。

クレイアは数回弾んだあと地面を転がる。が、すぐに立ち上がり迎え撃つ。

再度、交わる。

2人の距離は離れる。

ドラゴンは勢いを抑えることが出来ずに足が空回りしながら方向変換する。今一度クレイアを切り裂く為に。

クレイアは地面を滑りながら勢いを殺す。クレイアはドラゴンを見るが構えはしない。剣を鞘に納め目を閉じ集中する。

ドラゴンが迫るなか集中を高めていく。

そして、目を開く。

振り下ろされる三爪。かわしすれ違いざまに剣を抜き放つ。居合切り。

鱗を切り裂き、肉を切り裂く。血飛沫がほとばしる。

「ギョオオーーー！」

ドラゴンの悲鳴が挙がる。

そんなドラゴンにお構い無しに切り刻んでいく。距離を離し再度突撃するもクレイアはかわし、かわりに斬撃を浴びせる。

見る見る内にドラゴンは傷だらけになる。

もう何度目になるだろうか。間合いを空ける。

（これで決める！）

意を決し最後の一撃を加えるべく走る。疾風の如く。

しかし、ドラゴンもそれを察知したのか翼を広げだした。

突風が起こり土埃と草花が舞い上がる。

「飛ぶきか！？」

さらに翼に力が入る。ドラゴンの手足がゆっくりと地面から離れる。

クレイアは遠距離の魔法が出せないため次の一撃でキメることも当てることも出来なくなる。

「くっ！」

遠くで戦闘を見るアルとロン。

「やっぱり兄ちゃんスゲー」

「うん。それに動きが違う」

いつも優しいクレイアを見ていた2人。今の本気の戦闘を目の当たりにし恐怖すら感じてしまっている。

それにいつも特訓に付き合ってくれた時とは全然違う。別人とも思える動き。その動きを見て自分達とは実力が違うのだと改めて実感させられてしまう。

戦闘はクレイアの優勢で終わりを迎えようとしたところドラゴンが動きが変わる。

「なあ、ロン。ドラゴンのヤツ飛ばうとしてないか？」

「うん。もしかしてクレイア兄ちゃんヤバイかも」

「なんで？あんなに強いのに」

「アルはクレイア兄ちゃんが魔法使つてるとこ見たことある？」

「ないけど。今、魔力変換してるじゃん」

「そうだけど、でもそれだけだよ。普通の魔法を使つてない」

腕組みをしかえるポーズをする。

「そういえば・・・そうだな」

「でしょ」

納得するアル。魔力変換で身体強化は少ない魔力量で部分的に魔力を集めればいいが、撃ち出す魔法は多くの魔力と技術、才能が必要だ。

多分、クレイアは使えないのだろう。魔力を溜めようとはしていない。

ドラゴンは5、6メートルくらいの高さまで上昇している。いくらクレイアでも届くか届かないかの距離。

ドラゴンその高度を維持し口を開き炎を溜める。

「うわっ！あれマジヤバイよ！」

ファイアブレス。どのドラゴンも使える技。威力は個体差が

あるが強力な技。

「クレイア兄ちゃんが危ない！」

「・・・ロン！俺達で助けよう！」

「えっ！？無理だよ、俺達は何やったところで邪魔になるだけだよ！」

ロンが悲鳴混じりに叫ぶ。

「そうかもな。でも、あれなら何とかできると思う」

「あれって・・・たしかに何とかなるかもしれないけど、1回も成功したことないんだよ」

「でも、やるしかないだろ！兄ちゃんを助けられるのは俺達だけだろ！」

そう、今ここにはアルとロンしかない。アルの目には強い決意があった。

「・・・分かったよ、アル。やろう！」

ロンも覚悟を決める。

2人は目を閉じ集中する。2人の周囲にはそれぞれ違うオーラを纏っている。

アルは炎の赤いオーラを。ロンは地の茶色のオーラを。互いが互いの魔力の波長を探る。

そして、重なる。

「燃え盛る炎よ・・・」

「強固なる岩よ・・・」

声も魔力も重なる。

「くらえー！ メテオストライク」

合体魔法。

隕石には程遠い大きさではあるが大人を覆い隠すくらいはある。

まだ、未熟ということもありこの大きさが2人の限界である。だが、この2人の最強魔法だ。

燃え盛る巨岩はドラゴンに一直線に飛んでいき顔面に直撃する。

ぶつかった衝撃で火炎弾の照準がズレ大地をえぐる。ドラゴンは地上へと墜落する。

（アルとロンか。無茶して。でも、ナイスだ）

クレイアはそのまま走っていた。笑みを浮かべながら。

ドラゴンは派手に地面に叩きつけられる。その後ふらつきながらも身体を起こす。クレイアを睨み火炎弾を連続で吐き出す。

しかし、それでもクレイアは止まらない。次々と向かってくる火炎弾をかわし直進する。ただただ、地面に着弾するだけ。

そして、ドラゴンの眼前に迫る。

「無影剣」

クレイアの声だけを残して消える。身体も斬撃も影すらも。

気付いた時にはドラゴンの背後に剣を振り切った状態で立っ

た。何事もなかったように一度、剣を払ったあと鞘に納める。カキンツと音がした後、ドラゴンの肩口から横つ腹までに一筋の線が入り鮮血がほとばしる。身体が崩れるように倒れていく。

「ギヤオオー……」

その咆哮を最後にドラゴンは動かなくなった。

「ふう」

安堵の息が出てくる。

「兄ちゃん！」

「クレイア兄ちゃん！」

アルとロンが手を振りながらこっちに近づいてくる。2人の無事な姿を確認しなおのこと安心する。

「兄ちゃん大丈夫？」

「ああ、何ともない」

いつもの優しい笑顔で答える。2人もその笑顔を見て笑顔になる。

「あつ！でも、クレイア兄ちゃん肩が……」

そういえば左肩を切ったことを思い出す。

「大丈夫だつて！服を切っただけだから何の問題もないよ」

腕を組み少し声に力が入る。

「それより2人ともあんな無茶してダメだろ！もしかしたらそっち行っていたかもしれないだろ！」

今回はたまたま運が良かったただけだ。

「もうあんな無茶するなよ」

「ごめんなさい」

2人は下を見て反省している。そんな2人の反省する姿を上から見下ろす。

そして、2人の頭に手を置き

「でも助かった。ありがとうな」

そう言つて髪がグシャグシャになるくらい力強く頭を撫でた。2人に笑顔が戻る。

「よし、一回村に戻るか。ルドルフさんにも報告しないと」

クレイアが切り出す。

「うん！わかった」

2人の承諾得、村に戻ろうとアルとロンは歩き出した。

クレイアは少し考え事をしていた。今のドラゴンについて。

たしかにドラゴンの住む山は一つ先の山にある。でもドラゴンはその縄張りからは出ないはず。考えられることは食料が尽きたか。もしくは何物かに追い出されたか。

推測はできるが、答えは出ることはない。

（明日、行ってみるか？）

そんなことを考えていると小さいながらも地震が起きる。

「またか、最近多いな」

この一週間で何回も起きている。最近は揺れも小さくなってきたので大丈夫だと思うが・・・

「そういえば明日はアイツの・・・」

これは偶然なのか？それとも・・・。自然と顔が強張る。

クレイアは山の向こうにあるであろう王都を見つめていた。

そこで、ふと思いつく。幼なじみの顔を。いつも輝いていた笑顔。

思い出ただけで表情がいつもの顔に戻ってしまっていた。

「兄ちゃん！何やってんの？早くいこ！」

「ワリー！今、行くよ！」

アルに促され走り出すクレイア。

辺りはもう暗闇に包まれはじめていた。

パーティー前日2 悪い予感（後書き）

今度はクレイア側での戦いを書いてみました。

何でもそうですけど出来事などを文章にするのは難しいですね。

自分で思い描いた戦闘シーンを読み手の方々にうまく伝わればいいなと思っています。

集会

どこかの空間。辺りは真つ暗でよく見えない。唯一ある明かりはロウソクが数本ある程度でそんなに明るくもない。

そこに一人ソファアを占領している者がいる。

仕草からからして退屈そうにしている。しかし、フード付きのコートでせいで顔も性別も分からない。

「ふああーあーあ」

大きなあくび相当、暇なのだろう。

そこに現れる一つの影。「今、戻った」

女性の声。やはり黒のフードで顔が見えない。言葉には空間を凍らせるような雰囲気がある。しかし、それほど年上ではなく多分、20になるかならないくらいだろう。

「おつそいよ、セル姉」

「お前が早いんだ。それよりシャドウ、ちゃんと調べてきたのか？」

「あつたり前でしょ。僕をなめないでよ」

シャドウと呼ばれた者は幼さが残る声で言う。

「そう。なら、どうだったの？」

セル姉と呼ばれた女性が調べた結果を求めてくる。

「なんかね、ちよつとがっかりかな。もうちよとやれるのかと思っただけ、ぜんぜん」

「なら私達の出番は無しってところかしら」

「あつと！あくまで僕は全然って意味だからアイツらだけじゃちよつとキツイと思うよ」

「そう。たいしたことはないのね。アルバス王国のマリクも。あの人達でキツとなると・・・」

彼女は考える。

「それなら少し手を貸してやろつ」

もう一人現れる。力強い青年の声。仕草、雰囲気などからリーダー的存在の人だと思われる。

「ルナ兄！やつと来た」

ルナと呼ばれた青年。

「ルナ、それでは誰か一人が加戦すると言うことですか？」

「いや、丁度いい駒がいる。ソイツを使う」

「ふゝん。丁度いい駒ね。ソイツ強いの？」

「ああ、名の知れた者だ。お前も見れば分かると思う」

「へえ。それは楽しみ」

「それでは準備に取り掛かれ」

ルナが解散の号令をかける。

「了解」

「りょかい」

シャドウが先に消える。「セルシウスちょっといいか？」

シャドウにはセル姉と呼ばれていた女性はセルシウスという名前のようだ。

セルシウスは違う場所に向かおうと向きを変えたが呼ばれたため振り返る。

「はい。何でしょうか？」

「ヤツはどうだった？」

「力を使わないようにはしてるようです。しかし、魔力変換程度の力は使いこなしているようです。手負いだったドラゴン相手にそれだけで勝てるのはたいした剣術と身体能力です。そこはさすがと言ったところですね」

手負いと言う単語が気になる。

「このことから完全には使いこなしてはいない。それに力を使っていない為、魔力も育っていないと思われます」

セルシウスは調べてことを報告し結論を述べる。

個人の魔力量は最初はもちろん低い。しかし、魔力を使えば使う程、戦えば戦う程大きくなる。個人差で限界はあるが。

「そうか、暴走を恐れているか。なら力を使わせる状況を作ればいい」

不適な笑み。

「分かった。セルシウス、お前も持ち場に戻れ」

「はっ」

頭を下げ、もう一度上げた瞬間にセルシウスは消えた。

「ふん、いつまでも力を使わずにいられると思うなよ。お前が使わないなら無理にでも使わせてやる。あの方の復活のためにはお前の力が必要なのだよ。それまで死ぬことは断てじ許されない。それまでに強くなっているんだな、クレイア」

誰かに言うでもなく話している。何故ここでクレイアの名前かはまだ謎のままだ。

「お前にも役に立つてもらうぞ。そのために連れ出したのだからな」

「言われなくてもわかってるよ」

いつの間にか後ろに控えていた大柄な男がルナに近寄ってくる。

大柄な男はフードを付けていないため顔が確認できる。赤い髪の短髪。

何か良くない事が起きようとしている。

明日はアリアンティアの誕生パーティー。

謎の集団がひそかに動きはじめていた。

集会（後書き）

謎の集団の集会でした
いつもより短かったですけどどうですか？

パーティー当日 始まりの行進

揺れる馬車の中にアリアはいた。正面の席には王と女王が座っている。

馬車と言っても普通の馬車に比べれば何倍も大きく馬が引くのではなく像が引つ張っている。

外からは見えないようにカーテンで隠されている。

アリアからは見えないがアリアがいる馬車の周りには歩行する兵士、普通の大きな馬車で囲まれながら進んでいる。

「ふうー」

少なからず緊張しているようだ。というのも今日はアリアの誕生日パーティー当日でこの町の人達にも感謝の気持ちを込めてという感じで馬車で町を回るようになっていた。

今日の日程としては午前中は町を回る。昼食は城でいつもどおり取り、夜はパーティー本番で各国のお偉方などと夕食を食べたりダンスをしたりする予定である。

別に挨拶をする訳ではなくただ馬車の上上がり手を振るだけ。

「はあ、わたしこういうの得意じゃないんだけどな」

ため息とともに愚痴を吐く。別に町の皆が嫌いな訳ではない。逆に大好きだ。この町も。ただ大勢の前に出るのが苦手なだけだ。すると

「アリアンティア様、そろそろ広場です。テラスへお上がりください」

老執事がアリアに声をかける。

「あつ、はい。分かりました」

（よし！）

心の中で気合いの掛け声。その言葉と同時に立ち上がり、テラスへと進む。アリアを追うようにして王と女王が続く。

広場の中央には噴水があり道の歩道にはこの町の住民すべてがい

るだろうの人ばかり。それに加え隣の町の観光客、旅人なども混じっている。

アリアがテラスから顔を出すと大きな歓声が上がる。あちこちから、「あつ、皇女様だ」「皇女様、綺麗」「あのドレスとってもかわいらしい」などの声が聞こえてくる。

今日のアリアのドレスは白とピンクを織り交ぜたフリルの付いたかわいらしいものとなっている。

このドレスも高評価を得ているので昨日遅くまで考えたかいがあった。

「ほら、アリア。手を振ってあげなさい。笑顔でね」

「あつ、はい。お母様」

母に促されるままに手を振る。笑顔で。

とても嬉しい。自分の誕生日をこんなに大勢の皆に祝福されて嬉しくない訳ない。

本当にこの国に生まれてきて良かったと心の底から思える。それはこの町の人達がとつてもいい人達だから。この国を背負ってきた先代、父、母を誇りに思う。

そんなことを考えながら町の人達を見ている。馬車は進む。この平和な町を。馬車は何事もなく城へと戻る。

しかし、平和だと感じているのはアリアだけだった。

町は賑わっている。今、マリクは建物の屋上にいた。何をしているのかというもちろん警護だ。

その証拠にマリクの他にも何人も屋上に点々と待機している。

何も起きなければいいが昨日のこともある。本当は昨日の時点で捕まえられれば良かったのだが相手はマリクよりも上だった。そのため逃がした。

「くそっ！」

その事を考えただけで怒りがこみ上がりつい口から出てきてしま

う。

『マリク、そうイライラしないの。昨日のことはしょうがなかった』

レイヴィの声が聞こえてくる。これはテレパシーである。

人にはそれぞれ魔力の波長がある。その波長を探し声を送る。あまり離れては送れないがレイヴィはテレパシーと魔力感知に秀でている。そのかわり、他の魔法はてんでダメだ。

「うるさい！お前は黙ってる！」

怒りがさらに上がる。

『はいはい！分かりましたよ！』

レイヴィは簡単に引き下がる。マリクの性格を知ってのことだろう。

何も起きなければいいのだがそうもいかなかった。

アリアが馬車から出た時だった。正しく相手はこの瞬間を待っていた。

一本の矢が放たれた。それは間違いなくアリアを狙ったものだった。

警護の騎士が動くなかマリクは動じずその場に留まっている。それでも矢は進む。

そして、マリクは右手を前に出す。

「シールド」

矢はマリクの召喚した盾に防がれる。

幸いにも矢が放たれた事は群集もアリアさえも気付くことはなかった。もし気付くものがいれば大騒ぎ程度では済まされない。悪ければパーティーは中止だろう。

ちなみに防がれは矢は地面に落ちる前に違う騎士が回収済みである。

「逃がすか！」

マリクは走っていた。シールドを召喚した瞬間にアリアからは目を外して。マリクのシールドはオートで動くことができる。矢

ぐらいの物なら勝手に防いでくれる。

そしてマリクは向かう。矢の軌道から相手がいるであろう場所へ人影が見える。相手も家屋の上にいるようでそこから下に飛び降り逃げる。

マリクも後に続く。2人は家と家の間の狭い道を進んで行く。そして、周囲を高い塀に囲まれた場所に差し掛かる。行き止まりだった。

「鬼ごっこは終わりだ」

相手は仕方なくマリクに振り返る。フードのマントを着ている。相手は逃げ切れないと確信し懷に潜めていたナイフを取り出してマリクに襲い掛かってきた。

何の変哲もない直線的な攻撃。そんな攻撃がマリクにあるはずもなく軽くかわされ腕を身体の後ろに持っていかれナイフが地面に落ちる。

「貴様、何物だ」

マリクの問いには答える気がないようだ。せめて顔でも確認するべくフードを剥がす。

「っ！？女！？」

そう女性だった。年は20代半ばくらいだろう。しかし、その女性はマリクを睨み無言を通すのみ。

「チッ、ダンマリかよ！おい、こいつを連れていけ！知ってる事を全部吐かせろ！」

そう言つて後から来た騎士に彼女を渡す。

「何処に行くんだ、マリク！」

先輩の騎士なのか少しイラついた声でマリクに言う。

「まさかコイツ一人だけだと思ってるのか？あんたは」
さらにイラついた声で返す。

「なんだとー！お前はいつもいつも・・・」

まだ何か言っている先輩騎士を無視しこの場を後にした。

マリクの睨んだとおりアリアの命を狙った者は何人か発見された

が、だいたいはマリクが捕まえることとなった。

今はお昼を少し過ぎたくらい。マリクは城の廊下を歩いていた。話しは王にいつていると思うが一応、報告のために王の部屋に向かっていた。

その途中でアリアを出くわす。

「あつ、マリク君」

いつもどおり話しかけてくる。多分、アリアは昼食を食べ終わり一度、部屋にで戻るのだろう。

「アリアンティア様。午前中はお疲れ様でした」

アリアを労った言葉。

「うん、ありがとう。午前中だけで疲れちゃった」

「夜までは何ないのでそれまではお休みください」

「そうさせてもらうよ。夜まで体力がもたないかも」

「はい、それでは私はこれで」

「うん、マリクもあんまり無理しないでね」

マリクはアリアに一礼し王の待つ部屋に足を進める。アリアは何も気付かないままこの場を後にする。

「誰だね」

扉をノックした後、中から声が聞こえてくる。

「アーサー王様。マリクです。少しよろしいでしょうか」

「マリクか。中に入りたまえ」

「失礼します」

礼儀正しく中に入る。

「早速ながらアーサー王様。すでに耳にしていると思いますが・

・

「ああ、アリアを狙った者達の事か。聞いている」

アーサー王はマリクが言い終わるよりも先に言い返す。

「そうですか。今日のパーティーは続けるおつもりですか」

「・・・アリアには悪いが続けるしかなく。他国の王もこっちに向かっている。辞められる訳がない。王の中には気分屋の者もある。気分を損ねて同盟を破棄去れたらかなわん。このパーティーはあの子一人の問題ではないのだよ」

難しい顔になってしまふ王。実際のところアリアのお陰で同盟を結んでいるところがほとんどだ。アリアの・・・女神の存在のお陰でこの国も成り立っている部分もある。もちろん、アーサー王の手柄の良さなどもあるが。

「やはりそうですか。なら私達は守るだけです。アリアンティア様を」

「すまない、マリク。騎士達には城門を固めてもらっている。マリクも頼む」

「分かっております」

力強い返答する。すると、慌ただしい足音ともにノックがされる。

「アーサー王様！」

「どうした、入れ」 部屋に入る騎士。余程急いで来たのかすごい息遣いだ。少し呼吸を整えた後

「ハアハア・・・。た、大変です！港町が何物かに襲われている連絡がありました！至急応援をお願いします！」

「何！？」

王の口から驚きの声が出てしまふ。

「アーサー王様」

マリクが王の返答を待つ。

「・・・分かった。少し兵を送ろう。それとアラドも向かわせる」

「騎士団長がですか！それは有り難いです！」

「すぐに出発の準備を進めてくれ」

「分かりました」

通達役の騎士が急いで出ていく。

「マリク、お前はここに残って引き続き警護にあたってくれ。もしもの時はお前が対処してくれ」

「分かりました」

左胸に拳を当て了解のポーズをとる。

そう言っ てマリクも出ていく。

パーティー当日 始まりの行進 (後書き)

とうとうパーティー当日まで来ました。
これからいろいろ動きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1859z/>

黒きナイト

2011年12月25日12時46分発行